

# 日本における「赤ずきん」の受容：平成期を中心に

著者	野口 芳子
雑誌名	梅花女子大学心理こども学部紀要
号	10
ページ	1-12
発行年	2020-03-20
URL	<a href="http://doi.org/10.20832/00000205">http://doi.org/10.20832/00000205</a>

## 日本における「赤ずきん」の受容

—平成期を中心に—

### Reception of “Little Red Riding Hood” in Japan

: Focusing on the Heisei Era

野口 芳子

NOGUCHI Yoshiko

#### 要旨

この論文の目的は、平成期(1989-2019)に日本で出版された110話の「赤ずきん」を精査し、内容を分析することによって改変点を明らかにし、そこから平成期の子ども教育観、ジェンダー観などを読み取ることである。

平成期に出版された「赤ずきん」は、グリム版の原典に忠実なものが多いが、同時に自由に書き換えたパロディー調のものも目立つ。注目すべきは赤ずきんと祖母が結託して狼を石桶で溺死させる後日談を紹介する絵本や、救出者が母親に変わる絵本が出現することである。フライパンで狼を殴り殺す勇敢な母親が登場するのである。これらの絵本は、「強い男に守られる弱い女」という近代のジェンダー観を刷り込む役割を果たしていない点で注目に値する。一方、狼の腹を縫うのは、男の狩人から女性の祖母や娘の仕事にすり替えられていく。獣の皮を縫うという猟師の仕事が、裁縫という家事労働に置き換えられ、女の仕事に読み替えられたのである。ここでは家のなかでする仕事は家事であり、女の仕事であるというジェンダー観が刷り込まれている。

「悪なる存在」ではなく、赤ずきんと友達になりたい「善なる存在」の狼が登場し、「狼=悪」という偏見を捨てるよう説くパロディー版が出現する。教育上「人権尊重」と「警戒心」のいずれを優先すべきか、という問題が提起されているのである。

#### Abstract

This paper analyzed elements that were changed in “Little Red Riding Hood” in 110 Japanese translations published during the Heisei era (1989-2019), and to consider those changes from the perspectives of childhood education and gender.

Most books published during this period were faithful to the original text, but parody versions also appeared. The most remarkable change was the introduction of the second story, in which two women (grandmother and grandchild) worked together to drown the wolf in a stone tub. Another change was the appearance of the brave mother who came to the rescue, beating the wolf’s head with a frying pan and killing him. Such changes provided an important message from a gender perspective: instead of the idea that “a weak woman should be protected by a strong man,” there was the notion that “a clever woman can overcome a bad wolf without a man’s help.”

However, the person who sewed up the wolf’s stomach was changed from the hunter to the grandmother. Sewing up the beast, essentially the work of a hunter and considered men’s work, was replaced with needlework, and thus became women’s work. The fixed gender roles of men and women of the modern time were thus apparent in such books.

One enlightened change was the appearance of a good wolf. The good wolf approached the girl to become friends rather than to eat her. There are good wolves and bad wolves in the world; a child should not therefore be prejudiced to all wolves. We should consider what is more important: political correctness or alertness to strangers?

#### Key Words

赤ずきん、日本での受容、平成期、グリム童話、ジェンダー

Little Red Riding Hood, Reception in Japan, Heisei-era, Grimm’s Fairy Tales, Gender

## 1. はじめに

日本における「赤ずきん」の邦訳は明治期に12冊、大正期に16冊、昭和期に138冊あり、その特徴についてはすでに先行研究で明らかにされている<sup>1)</sup>。本論では平成期における受容に焦点を当てて、改変点や問題点などについて考察する。平成期に出版された「赤ずきん」を包括的に調査した先行研究はまだ存在しないので、本論が最初の研究といえる。平成期(1989年1月8日-2019年4月30日)に出版された「赤ずきん」のうち、本や雑誌や紙芝居など紙面で出版されたものに焦点を当てて資料を収集した。主として国立国会図書館、大阪府立国際児童文学館、東京都立多摩図書館、日本近代文学館、梅花女子大学図書館などの図書館での複写、書店やインターネットサイトでの購入という方法で資料を収集した。

## 2. 平成期に出版された「赤ずきん」の概観

平成期に出版された「赤ずきん」は110冊収集することができた。筆者が調査した結果、それらの話はほとんどがグリム版の話で、ペロー版の話は3話のみであることが判明した。ペロー版と明記されているものは6話存在するが、内容を検討すると、両者が喰われたまま終わる話(ペロー忠実版)は2話しかなく、残りの4話は両者が救出されて終わる、グリム版結末の話である。後の1話はペロー版と明記されていない本である。ようするに平成期に出版された「赤ずきん」は、大多数がグリム版の話なのである。

グリム版に分類されたもののなかには、結末はグリム版であっても、話の内容が改変されたもの、たとえば、祖母が喰われず娘だけが喰われるもの、祖母だけ喰われて娘が喰われないもの、両者とも喰われないもの、狼が殺されず、逃がされたり、許されたりするものなど様々な改変版が存在する。そのうち改変の度合いが弱いものをグリム改変版とし、度合いが強いものをグリム改作版とする。さらに赤ずきんが狼を出し抜くフランス民話版や、グリム版やペロー版とは異なる内容に物語を展開しているパロディー版も存在する。

それらを本論ではグリム忠実版、グリム改変版、グリム改作版、ペロー忠実版、フランス民話版、パロディー版に分類する。なお、最初はペロー版でも両者が救出される場合は、グリム改変版かグリム改作版に分類する。

## 3. 「ペロー版」の「赤ずきん」について

### 1) ペロー版と明記されている絵本の分析(6冊)

(1) 1989(平成1)年、ペロー原作、定松正訳『赤ずきん』(ワンス・アポンナ・タイム・シリーズ)④は<sup>2)</sup>、挿絵ではなく、サラ・ムーンの写真を入れた英語版の本を訳したもので、話の筋はペロー原典にほぼ忠実で、両者とも喰われて話が終わる。原典と異なるのは、歯が大きい理由を聞く娘に「それはな、おまえをよく食べれるようにさ!」という答えで話が終わる点だ。ペロー原典では「そういうと悪い狼は、飛びかかって赤ずきんを食べてしまった」で終わり、その後「教訓」が付く。ここでは実際に食べたという文言や教訓が欠落している。また、森のなかに「狩人」がいたから、狼は娘を食べることができなかつたとされているが、原典では「樵」がいたからである。一方、赤ずきんが服を脱いで狼のベッドに入る場面は忠実に訳出されている。

(2) 1990(平成2)年、ペロー作、TBSブリタニカ訳、リマ絵『赤ずきん』⑤では持参品は原典のクッキーとバターではなく、ドーナツとぶどう酒に改変されている。母親は道草だけでなく、森の中を通ることを禁じる。赤ずきんは村を通って行くが、花摘みのため森に入る。娘は「手耳目口」(足が不足)が大きい理由を聞いてから、狼に喰われてしまう。その後、猟師が鉄砲で狼を撃ち、鋏で腹を切って祖母と娘を救出する。

(3) 1991(平成3)年、シャルル・ペロー原作、小林忠夫訳、レイモンド・ブリッグズ絵『赤ずきん』⑩は、ブリッグズの世界名作童話集に入っているもので、祖母ではなく両親が赤いコートを娘の誕生日に贈る。赤ずきんは狼のベッドに入らない。「腕耳目歯」が大きい理由を聞いた後で、娘は狼に喰われてしまう。狩人が来てハサミで狼の腹を切って祖母と娘を救出する。娘は二度と道草したり、狼と話したりしないと反省する。

(4) 1994(平成6)年、シャルル・ペロー原作、久米穰文、ホセ・ラバレイヨ絵『あかずきんちゃん』⑬では、狼は祖母をクローゼットに入れて喰わず、赤ずきんのみを喰って森に帰る。祖母から事情を聞いた樵の父親が森で寝ている狼を発見し、腹を裂いて娘を救出する。腹に石を詰められた狼は、水を飲もうとして、川に落ちて死ぬ。ペロー原作と明記されているが、結末がグリム版になっているので、グリム改作版とする。

(5) 2001(平成13)年、池田香代子訳「ペローの赤ずきん」⑭は、最後の教訓も訳出しており、ペロー版にもっとも忠実な絵本である。フランス人画家エリック・パトゥの絵入りで、スイスで出版されたドイツ語版『赤ずきん』(*Rotkäppchen*, Zürich: Bohem Press-Kinderbuchverlag 2000)を訳出したものである。訳者池田は原著者シャルル・ペローおよび『ペロー昔話集』について、解説欄で詳しく説明している【図1】。

(6) 2016 (平成 28) 年、シャルル・ペロー原作、山西和枝文のオペラ『赤ずきん』④はペロー版の出だしで始まるが、両者が救出される結末はグリム版に近い。異なるのは救出者が複数の猟師と樵で、赤ずきんが狼の命乞いをする点だ。腹を切られて改心した狼は、人間を襲わないと約束して幕が下りる。グリム版と大きく異なるグリム改作版といえる。



【図1 E・パトゥ絵 池田香代子訳 42】

## 2) ペロー版と明記されていない絵本の分析 (1 冊)

2019 (平成 31) 年、「赤ずきんちゃん」吉澤康子/和藪桃子訳、アーサー・ラッカム絵『夜ふけに読みたい 不思議なイギリスのおとぎ話』⑩は、イギリスの昔話であると明記しているが、話の内容はペロー版にほぼ忠実である。異なる点は、この道とあの道でどちらが早い競争しようという狼の台詞が欠落している点、狼が食べていなかった期間が3日から1週間になっている点、狼が娘に求めるのが床入りからキスに変更されている点である。最後はペロー版同様、両者は食べられたまま終わる。

## 3) 分析結果と考察

上記7冊を分析すると、ペロー版に最も忠実なのは池田訳④であり、次が定松訳④と吉澤/和藪訳⑩であることがわかる。結局、両者が死んで悲劇で終わるペロー版は3話のみである。ペロー版と明記されず、イギリスの昔話と明記されている話がペロー版に忠実な内容であるのがなんとも不思議である。TBS ブリタニカ訳⑤と小林訳⑩と久米訳⑧と山西訳④は、両者が救出されるグリム版結末を付与した話である。ペロー版と銘打っているが、むしろグリム版に分類されるべき話であろう。ペロー版では母親が娘に注意事項を言わないが、グリム版では5つの注意事項をいう。TBS ブリタニカ訳⑤では道草や挨拶について言及し、小林訳⑩では母親の注意事項はないが、最後に赤ずきんが道草したことや狼と会話したことを反省する。久米訳⑧では娘に注意するのは樵の父親である。祖母を食べず赤ずきんだけ食べて森で寝ていた狼の腹を裂き、救出するのもまた父親である。山西訳④では母親は寄り道とふざけることを注意して娘にキスをする。狼の命乞いをする娘の優しさと、改心する狼を許してやる人々の寛大さが強調された話である。この改変は訳者によるものではなく、1912年に出版されたロシア語台本で行われたものである<sup>3</sup>。

ペロー版と明記され原典に忠実な2冊の本は、いずれもフランス人芸術家による写真や挿絵が入ったものである。サラ・ムーンもエリック・パトゥもフランス人である。おそらくフランス語のペロー版を英訳したものを日本語に重訳したのであろう。一方、グリム版結末に改変された4冊については、ブリッグズ絵本編集者ヴァージニア・ハヴィランドはアメリカ人で、挿絵画家レイモンド・ブリッグズはロンドン在住のイギリス人である。TBS ブリタニカの本はイタリアのファブリ社が出版したイタリア語の本を『ファブリ世界名作シリーズ』(Fabbrì's Treasury of world Classics)として英訳して出版したものである。日本のTBSブリタニカ社はイタリア語から翻訳し、挿絵画家リマ(Lima)もイタリア人であると明記している。リマは筆名で、本名はリビコ・マラヤ(Libico Maraja)である<sup>4</sup>。久米訳⑧はスペイン語の本、CAPERUCITA ROJAを訳したもので、バルセロナのパラモン社が版權を保持している。山西訳④の改変はロシア語原典の台本で、マリーナ・スタニスラヴォヴナ・ポルが行ったものである。したがってこれらの改変は英米、イタリア、スペイン、ロシアなどでなされたものと考えられる。おそらくペローのフランス語原典に忠実な絵本はフランス人の挿絵や写真が入ったフランス語の本を底本とし、改変された絵本は英語、イタリア語、スペイン語、ロシア語など外国語の本を底本としたのであろう。

## 4. 「グリム版」とされている「赤ずきん」について

### 1) グリム版と思われる本の概観

グリム版と明記されている本は69冊ある<sup>5</sup>。そのうちグリム版にほぼ忠実な本は41冊<sup>6</sup>、改変が加えられた本は23冊<sup>7</sup>、大幅に改変された改作版は4冊②⑩⑨④、フランス民話は1冊⑩である。グリム版と明記されていない本(ペロー版と明記も含む)で、内容からグリム版と判断できるものは31冊ある。そのうちグリム版にほぼ忠実な話は3冊③⑥⑦、グリム改変版は22冊<sup>8</sup>、内容を大きく変えたグリム改作版は6冊<sup>9</sup>である。これらを集計すると、グリム忠実版は44冊、グリム改変版は45冊、グリム改作版は10冊で、合計99冊がグリム版に基づいた話ということになる。大幅に改作されたパロディー版5冊については出典が未記載であり、次章で分析する。

### 2) グリム版にほぼ忠実な本(44冊)の分析

## (1) 後日談まで収めている本 (6冊)

グリム童話集に収録されている第2話、学習した赤ずきんと祖母が狼を水槽で溺死させる話(後日談)も収録している本が6冊存在する<sup>10</sup>。そのうち2冊は単行本で、3冊は絵本で、1冊は漫画本である。単行本は1990年の乾侑美子訳『グリムの昔話から1』⑨と1996年の天沼春樹訳『グリム・コレクション1 魔法の森の女たち』⑳で、いずれも原典に忠実な訳である。絵本は1991年の武井直樹文、湯村タラ絵『あかずきん』㉑と2001年の落合恵子訳『あかずきん』㉒と2012年の那須田淳訳、北見葉胡画『あかずきん』㉓である。漫画本は2002年の樋口雅一著『まんがグリム童話 第1巻』に収録されている「あかずきん」㉔である。

1991年の武井訳㉑の絵本では湯村が赤ずきんを青い服に赤いマントというスーパーマンを思わせる衣装で描いている。話の筋はグリム版に添っているが、表現には変更や簡潔化が施されている。母親は道草のみを注意し、祖母の異常を確認する娘の質問は「耳目口」(手が欠如)の3箇所についてだけである。狼は赤ずきんを食べてから、デザートとしてケーキを食べワインを飲む。狩人は赤ずきんの帽子が床に落ちていたので、狼が娘を食べたと確信し、ハサミで狼の腹を切る。娘と祖母を救出し、皆で石を詰めて祖母が縫う。石を詰められた狼は死なずに森へ帰る。数日後、赤ずきんは同じ狼に出会うが、口を利かず祖母の家に直行する。戸が施錠されていたので、狼は屋根で待つ。祖母がソーセージを焼いて、赤ずきんがそれを棒の先につけて窓から突き出す。狼はそれを食べようとして首を伸ばし、水桶の中に落ちる。生死は不明である。原典では狼をおびき寄せるのは「ソーセージのゆで汁」だが、ここではソーセージそのものである。それを棒につけて窓から屋根に差し出す赤ずきんの勇姿がスーパーマンを想起させる衣装で描写されている。特筆すべきは、後日談を分けず連続した話として描いている点である。石を詰められた狼は生き延びて再び娘と出会うが、学習した娘と祖母にやり込められる。原典では狼は溺死するが、ここでは狼の生死は不明である【図2】。



【図2 湯村タラ絵 武井訳11】

2001年の落合訳の絵本㉒にはガイスラーの「ドイツ一枚絵」<sup>11</sup>やテオドル・ホーゼマンなどドイツ人画家の絵が数多く挿入されている。ドイツ語題名(KHM26 Rotkäppchen)を明記した、原典に忠実な訳である。注目すべきは「かわいさやむくであることが、女の子に求められる最大の価値であったところの、ことです」や、後日談のあとの「襲ったり襲われたりしない関係性を拓くことが、遅れがちです」というフェミニストならではの落合の加筆である。



2012年の那須田淳訳、北見葉胡絵の絵本㉓は、簡潔な文体と情感のある絵で描かれた美しい本である。母親の注意事項は「挨拶する」「わき道に入らない」の2点だけだ。狼が祖母を呑み込む絵が迫力あるタッチで描き出されている。狼は腹の石が重くて倒れて死ぬ。狩人は毛皮を剥ぎ、祖母は持参品を飲み食いして元気になる。赤ずきんはわき道にそれたことを反省する。後日談は原典とほぼ同じ内容である。学習した赤ずきんと祖母が失敗を繰り返さず、ソーセージのゆで汁で狼をおびき寄せ、石桶に落として溺死させた後日談を載せてこそ、この昔話は失

【図3 北見葉胡絵 那須田訳74】 敗により学習力を獲得した娘の話として教育的意図が明確になる。本文を改変せず後日談まで載せている、原典に忠実な貴重な絵本である【図3】。

2001年の樋口雅一著『まんがグリム童話 第1巻 親が知らない「子の心」』に収録されている「赤ずきん」㉔は、後日談まで入れた原典に忠実な内容の漫画である。ただ、狼の腹を縫うのが祖母になっている点が気になる。西村佑子が解説で、グリム版だけでなく、フランスのペロー版も存在することや赤帽の由来を説明している。著者樋口は聖書を漫画化した人で、日本の漫画文化の水準の高さに貢献している人だけあって質の高い漫画化を実現している。

## (2) 後日談を収めていない本 (12冊)

後日談を含まず、第1話を原典に忠実に訳している本は12冊存在する<sup>12</sup>。そのうち文字を主とした単行本が6冊<sup>13</sup>、絵本が6冊である<sup>14</sup>。単行本は1999年の西本鶏介訳『グリム童話』㉕、2004年の北川幸比古/鬼塚りつ子訳『グリム・イソップ童話集』㉖、2004年の山口四郎訳『グリム童話1』㉗、2007年の小澤俊夫監訳『語るためのグリム童話2』㉘、2011年の楠山正雄訳『赤ずきんちゃん』㉙、2012年の西本鶏介文『グリム童話』㉚の6冊である。山口訳と小澤訳にはドイツ・マールブルク出身の画家オットー・ウベローデの白黒の挿絵が入れられている。小澤訳はグリム童話の決定版ではなく第2版の訳である。楠山訳㉙は東葛西豆本シリーズで、極少サイズ

の貴重本である。原典では赤ずきんが石を集めてきて、「みんなで」狼の腹に詰めて縫うのだが、北川/鬼塚訳、小澤訳、楠山訳では「赤ずきんが」詰めて縫うとなっている。

絵本は1995年の小池タミ子文、奈良坂智子絵<sup>22</sup>、2006年のまえたえま文、ふりやかよこ絵<sup>69</sup>、2009年の山本まつよ訳、マーレンス・カチューピカ絵<sup>67</sup>、2012年の大塚勇三訳、フェリクス・ホフマン画<sup>75</sup>、2013年の佐々梨代子/野村法訳、ハンス・フィッシャー絵<sup>9</sup>、2014年の矢川澄子訳、こみねゆら絵<sup>22</sup>の6冊である。このなかで

原典に最も忠実な絵本は佐々/野村訳と大塚訳の2冊である。佐々/野村訳は文章が多く、絵が少なく、カラー絵は1頁しかない。後は小さな白黒の挿絵が入っているだけである。大塚訳も忠実な訳であるが、1箇所だけ原典と異なるところがある。狼の腹に石を詰めるのが、「赤ずきん」になっている点である。ホフマンのラフなタッチの絵は素朴で味があり、昔話らしさを伝えている。しかし絵と文の内容が一致しない場面がある。最後に食卓についてケーキを食べワインを飲むのは祖母のみであるが、3人が食卓について飲み食いしている絵が挿入されている。この場面は佐々/野村訳でも文面と異なり、3人だけでなく鹿や兎まで一緒に食卓について飲み食いしている絵をフィッシャーが描いている。この場面を文面に忠実に描いているのは奈良坂のみである。小池訳の本の裏表紙に描いたもので、祖母がひとりでワインを飲み赤ずきんが差し出すケーキを食べている絵になっている【図4】。まえたえの本では祖母がワインを飲み、赤ずきんがケーキを食べる絵が描かれている。



この本は母親と一緒に赤ずきんグッズを作りながら読む「おあそび絵本」である。【図4 奈良坂智子絵 小池訳22】この種の本にしては話の内容が原典に忠実で、母親が娘にする5つの注意事項もそのまま入れられている。しかし赤ずきんが石を集めて、皆で狼の腹に入れて縫い合わせるころは、祖母が縫い合わせると変えられている。猟師が皮を剥ぎ、祖母が飲み食いして元気になり、赤ずきんが寄り道を反省するのが原典である。未成年の飲酒が問題視され、「赤ずきん」を禁書にした国があるということだが<sup>15</sup>、原典ではワインを飲むのは祖母のみで、病気を治す薬用効果を期待しての飲酒である。

(3) 話の骨子に忠実だが、簡略化されている本(27冊)

話の筋には忠実であるが、表現が簡素化されている本でグリム版と明記されているもの24冊<sup>16</sup>、明記されていないものが3冊<sup>38,35,7</sup>ある。簡素化されている箇所は、主として次の3点である。母親の5つの注意事項が「道草」のみになる点<sup>17</sup>、花摘みは娘が思いつくのだが、狼の提案になっている点<sup>18</sup>、腹から救出された祖母は瀕死の状態だったという記載がない点<sup>19</sup>、赤ずきんが石を集めて、皆で腹に詰めるという原典の表現は6冊のみで<sup>20</sup>、すべてを3人がしたり<sup>21</sup>、赤ずきんがしたり<sup>22</sup>、と様々に改変されている。



【図5 大竹茂夫絵 天沼訳51】絵が強烈な印象を与えるのは天沼訳<sup>51</sup>で、大竹のファンタスティックアートの絵が見る者を釘付けにする【図5】。子ども向けに簡略化しながら擬声語を多用し、原作の要素を忠実に反映しているのは、1999年の立原訳<sup>34</sup>と、2018年の中脇訳<sup>104</sup>である。特筆すべきは、日本風に改変して人物を描いている2001年の矢川訳<sup>43</sup>である。飯野が赤ずきんや両親を日本の農民の姿にして描いている【図6】。2000年と2007年のいもと訳<sup>36</sup>では娘と祖母は腹から救出され、皆で狼の腹に石を詰めたときとされているが、絵には祖母が腹を縫う姿が描かれている。いもとの本は英訳され、英語版(2003年)<sup>23</sup>が出版されている。そこでは赤ずきんが石を詰めて縫う姿が描かれている。日本語版では祖母が縫い、英語版では幼女が縫う。同じ内容の話が異なった絵で表現されているのはなぜか、理由は不明である。



【図6 飯野和好絵 矢川訳43】

3) グリム版の改変版(45冊)と改作版(7冊)

グリム版の改変版は45冊<sup>24</sup>、改作版は7冊<sup>25</sup>ある。最大の改変は最後に悪い狼が殺されないことである。そのまま森に逃げるのが9話<sup>26</sup>、死なないのが3話<sup>24,28,3</sup>、生死不明なのが10話<sup>27</sup>ある。原典では腹に石を詰められた狼は腹が重くて床に倒れて死ぬのだが、銃殺されたり<sup>58,107</sup>、井戸<sup>66,102</sup>や川<sup>80,97,88</sup>で溺死したりする。おそらく「狼と7匹の子山羊」の結末が混成され

たのであろう<sup>28</sup>。腹に石を詰められたのが原因で狼が死ぬのであれば復讐したことになる。しかし水を飲もうとして、狼が井戸や川に落ちて溺死するのなら、不注意による自死ということになり、復讐したことはない。悪い狼に主人公が食べられて終わるのがペロー版、悪い狼が退治され主人公が救済されるのがグリム版だとすると、主人公は救済されるが、犯人は退治されないのは、別種の話であるといえる。

原典では赤ずきんは狼に祖母の家を詳しく教えるが、改変版では教えない。そもそも狼は家の場所を聞かない<sup>29</sup>。原典では赤ずきんが自らの判断で花摘みをするが、改変版では狼に勧められてする<sup>30</sup>。母の注意を無視して寄り道したのは、悪い狼の計略に引っかかったからである。この改変は赤ずきんの非を和らげるものである。なぜなら、知らない人に祖母の家の情報を教えたり、花摘みするために寄り道したり、禁止事項を犯すのは狼のせいであり、娘のせいではないと読めるからである。この他、赤ずきんが狼にする質問が、「耳目手口」から「耳目口」の3カ所になっているものが21話もある<sup>31</sup>。

赤ずきんは狼に喰われず、祖母のみ喰われる話⑩⑪、祖母は喰われず、赤ずきんのみ喰われる話⑩、両者とも喰われない話④もある。また主人公の性格や訪問の動機が異なる話⑩④もある。森の中を歌いながら歩く赤ずきんは天真爛漫で祖母から諭されても反省せず、肩たたきをしてごまかす⑩。赤ずきんはこれまで何度も祖母宅を訪問しており、「どんなときでもそこへ出かけていくのが大好きだったのである」④。

「赤ずきん」の話は、少女が初めてひとりで祖母宅を訪問するということが重要な意味を持つ「イニシエーション」の話である。成し遂げられなければ「共同体の一員」として認められない、つまり社会的死をもたらすのである。それゆえ、ペロー版では「死」で終わるのである。グリム版では第1話で大人の男性を登場させて、イニシエーションに落第して命を落とした娘を救出させ、第2話（後日談）で学習した娘が狼に騙されず、退治して帰還する。つまり娘は、再挑戦でイニシエーションに合格したのである。それゆえ赤ずきんが祖母を訪問するのは初めてでなければならない。すでに何回も訪問しているのでは、イニシエーションの話ではなくなってしまふ。また失敗を反省しない娘も学習能力に欠けるので、イニシエーションを無事通過するのは無理であろう。その意味でこの2話は、グリム版とは異なる意味を持つのである。

## 5. ペロー版やグリム版に分類できない改作版とパロディー版

### 1) 両者に分類できない改作版とパロディー版の概観

大幅に改変された改作版は11話存在する。そのうちグリムと明記されたものが4話、ペローと明記されたものが2話、いずれとも明記されていないものが5話ある。そのうえ話の筋が大きく異なるパロディー版も5話存在する。改変された箇所を分類すると、救出者が父親とされている話⑫⑬、母親とされている話⑭、ハリネズミとされている話⑮、赤ずきんが腹の中で叫び⑯⑰、大声で歌う話⑱、狼は殺されず、赤ずきんに助けられる話⑲、妖精に改心させられる話⑳、赤ずきんに好意をもち友達になる話㉑㉒、赤ずきんと友人と母親が全員赤い頭巾を被ぶり、3人の赤ずきんになって狼を混乱させる話㉓である。

### 2) 救済者が改変されている話

#### (1) 救出者を父親に変更

1991年の若林訳⑫はグリム版と明記しながら狩人ではなく、樵の父親が登場し、狼の頭を撃ち殺し、両者を救出する。「母と娘」の話が「両親と娘」の話に変えられている。この種の改変は多くの英語訳で行われているが、どの英訳本を底本としたか明記されていない。しかし、おそらく1988年イギリスで出版されたヴェラ・サウスゲート再話版が用いられたのではないだろうか<sup>32</sup>。なぜなら、樵の父が出現する英訳版では赤ずきんが間一髪のところでは食べられず、祖母だけが食べられる話がほとんどであるが、サウスゲート再話版では両者が食べられるからである。1994年の久米訳⑬も同様の展開をしている。狼は祖母をクローゼットに閉じ込めて喰わない。狙いを娘に定めているからである。ここでも樵の父親が登場して、斧で狼の腹を切って娘を救出する。赤ずきんのみが喰われて、祖母は喰われない久米訳には、スペインのパラモン社出版の本を底本としたと明記されている<sup>33</sup>。しかし、同じ内容の英語版がすでに1959年にニューヨークのクラウン出版社から出版されている<sup>34</sup>、英語版が先か、スペイン語版が先か、詳細は不明である。いずれにしろ邦訳者が行った改変でないことだけは確かである。

#### (2) 救出者を母親に変更

1995年の斉藤訳⑭では赤ずきんは反抗的な娘で祖母の家に行くのを嫌がる。娘は狼が襲ってきても箆を振り回して雄々しく対戦する。そこに母親がやって来てフライパンで狼を殴り倒し、腹を裂いて祖母を助け出す。祖母は腹に玉ねぎを詰めて糸と針で縫い合わせ、狼を外に放り出す。目覚めた狼は「ひでえめに あったげ もうばあさんは こりごりだ」という。

これは1992年8月にスコットランドのコリンズ社から出版されたジョナサン・ラングレイ著の本を邦訳したものである。赤ずきんは反骨精神旺盛な自己主張する娘で、母親も積極的に勇敢な女性である。父親ではなく母親が救出するところにフェミニズム運動の影響が感じられる。男に頼るのではなく、女同士が団結すれば窮地を脱することができるというフェミニズムの教えを表現している【図7】。バブル崩壊後、日本においても欧米同様、伝統的価値観に縛られず様々なことにチャレンジする女性が現れる<sup>35</sup>。欧米化した日本はフェミニズム運動を経て、女性たちの多様な生き方を認める時代になっていく。エリートとしての女性ではなく、主婦の女性が男性をもしのご勇氣と力で悪者を退治する話は、ポスト近代のジェンダーを示唆するかのようである。



### (3) 救済者を針鼠に変更

2009年のすぎうらさやか文／絵の本<sup>65</sup>では、救済者が針鼠である。針鼠のハローとハリーが狼の腹を鋏で切り、2人を救出する。ハリーが腹に潜り込ん【図7 ジョナサン・ラングレイ絵・文 24】で暴れると、狼は痛がってハリーを吐いて逃げ出し、二度と娘に近寄らない。救出者を人間の男から針鼠に変えた杉浦は「赤ずきん」が伝承文学であり、多くの異型があることを熟知している。「わたしは、ただただ『かわい



い』あかずきんを描きたかった。赤いずきんを被りバスケットや花を持つ、「砂糖菓子みたいな、最強の女の子を」描きたかったと杉浦は解説する【図8】。「最強の女の子」の条件が「かわいさ」であるとしているところに、「かわい文化」が大流行した時代の風潮を読み取ることができる。事実、2009年2月26日、外務省は日本の「かわいい文化」の代表を「ポップカルチャー発信使」、通称「カワイイ大使」と命名し、3人の女性を任命している<sup>36</sup>。またNHKも2010年2月18日「東京カワイイ★TV」という番組をスタートさせ、海外でブレイクする「かわいい」を取材し放映している<sup>37</sup>。杉浦は「かわいい」を「赤いずきん」「バスケット」「花」「さとうがし」「ハリネズミ」などで表現している。「小さくて丸い小動物」という意味で、ハリネズミもかわいいペットの範疇に入るのであろう。ただ、「かわいさ」を武器にするという発想は、女性は男性から保護され可愛がられる存在という見方から来るものであり、女性を男性と対等の自立した存在という見方から来るものではないということ肝に銘じるべきである。

【図8 すぎうらさやか絵文 65】

### 3) 犠牲者が歌う話

2005年の川元咲乃／木野彩花文の「AKAZUKIN POP in CUP」<sup>64</sup>では、あかずきんは眠り込んだ狼の腹の中で「負けないわ！」を大声で歌う。それに気づいた狩人が鋏で腹を「ジョキ！ジョキ！ジョキ！」と切る。「ありがとう あかずきん！」祖母は赤ずきんの歌で元気になる。あかずきんは「ちょっと汚れちゃったけど、それは冒険のしるし。ちょっぴりおとなになったね。」あかずきんは「オオカミなんて こわくない」を歌い話が終わる。歌に合わせたリズムカルな台詞が魅力的なミュージカル調絵本である。

### 4) 狼が改心して森の番人になる話

2009年の西川律子文／絵『もうひとつの赤ずきんちゃん』(Another Little Red Story)<sup>68</sup>では、腹が痛くて苦しくなり、後悔して泣き出した狼に、妖精の狩人が魔法をかけると、腹の石は悪い心や腹痛を治す薬になる。狼の体は森と同じ緑色になり見えなくなる。その後、狼は森に来る人を守る心優しい森の番人になる。「あかずきんちゃんもおばあさんも、みんなよろこび、なかよくしあわせにもりでくらししました」で終わる。英語併記のこの本は、西川が英語学習を意図して書いたものである。幾何学模様でカラフルな抽象画が豊富に入れられた芸術性の高い楽しい絵本である。米国チャールストン大学ファインアートスクールで絵画を学んだ西川は、少女期を病棟で過ごし、生と死を見つめていたことがあるという。「イメージの世界で自由に、楽しく遊べる絵本を、大変だった英語生活の体験をもとに、二か国語で書きたくなりました」<sup>38</sup>という著者の言葉が心に響く絵本である。

### 5) 3人の赤ずきんが狼を追い払う話

2010年の竹内もと代作『魔法つかい赤ずきんちゃん』<sup>69</sup>は、祖母が狼に喰われる夢を見て、朝起きるとすぐ



猟師の家に行く。銃の調子が悪いので、猟師と赤ずきんは狼退治の作戦を練る。母親と友人の少女も同じ赤い頭巾を被り、3人の赤ずきんで狼を混乱させ森から追い出すという作戦だ。作戦は見事に成功し、狼は混乱しながら森へ逃げていく。現実には起こることを前の晩に夢で見るという超能力を持つ少女は、「魔法使い赤ずきん」と呼ばれている。銃が壊れて役に立たない猟師の力をうまく利用しながら、3人の女性がスクラムを組んで狼を撃退するという話は、「赤ずきん」を基にして創作されたパロディー本である。団結すると、女性は男性に打ち勝つことができるというメッセージを伝えている点で、「フェミニズム・パロディー」ともいえる。

#### 6) 赤ずきんに好意を持った狼の話 (2話)

狼は赤ずきんが好きで友達になりたかったという話<sup>⑩</sup>がある。1996年の上野与志文『赤ずきんちゃんきをつけて』<sup>⑩</sup>では、赤ずきんは母親に頼まれて祖母に手紙を届けに行く。自ら摘んだ花を動物たちに与えながら、迷路の森を案内してもらう。狼は「なんてかわいい子だろう」と娘を見ているが、声をかけられない。祖母の家に着いて手紙を渡すと、祖母はクッキーとサンドイッチを作ってくれる。娘はリスにクッキーを、熊にサンドイッチをやる。狼は娘に好きだと告白し花束を渡す。娘はクッキーとサンドイッチを狼にやる。今日から2人は友達だ。「よかったね、おおかみくん」で話は終わる。

2018年のカトウシンジ著『あかずきんちゃん』<sup>⑪</sup>では、母親が死んでから孤独で閉じこもりがちな狼は、赤ずきんに声をかけられて隠れてしまう。娘が転んだので、大丈夫と声をかけると、娘は脅したと言って狼に怒る。山羊のミルクがこぼれて、祖母へのみやげがなくなり、「オオカミなんかだーいきらい」という。狼は気絶して目の前が真っ暗になる。気絶した狼を抱えて娘は祖母の家に行き、ベッドに寝かす。「いろんなにんげんがいるように、いろんなオオカミがいるんだよ。」狼の子どもは目を覚ますと、泣き出し、「ぼくね ずっと ともだちが ほかあったんだ!」という。「じゃあ あたしが ともだち」と娘が答える。祖母は「まあ、かわいい おめでとう」と狼を抱きしめ、赤ずきんも抱きしめる。3人は幸せそうにパーティーをし、「ほわほわりん」で終わる。

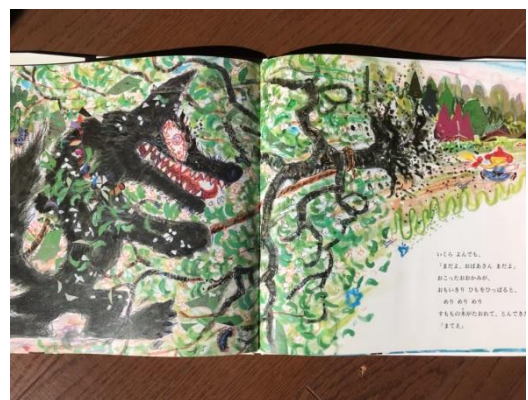
上記の2話は狼に対する固定観念を覆す解釈である。隠れて赤ずきんを見る狼も様々である。一概に娘を食べたいと思う狼だけではない。娘に好意を持つ狼も、友達になりたいと思う狼もいる。外見だけで判断して、すべての狼を「怖くて悪い」存在と決めつけるのはやめよう。先入観や偏見で他者を見ることはやめよう、ということ説いた貴重な絵本である。

#### 7) フランス民話版の話、

1992年の樋口淳文『あかずきん』<sup>⑫</sup>は、娘が狼を出し抜くフランス・トゥーレーヌ地方の昔話を収録した絵本である。狼は婆さんを「あたまからばりばりたべてしまった。そしてのこりをなべにいれて火にかけた。」狼は赤ずきんに肉と葡萄酒を勧めるが、鳥が祖母の血だと忠告したので娘は食べない。ベッドに入り(脱衣はしない)、「手耳目口」について質問すると、身の危険を感じ、おしっこがしたいという。娘は脚を紐で結ばれて便所に行くと、紐をスモモの木に結び付けて逃げる。「まだか」という狼の質問に小鳥が返事する。狼が紐を引っ張ると木が抜ける。娘は無事自宅にたどり着くが、狼は川で溺死する。原典では娘は裸になってベッドに入り、裸のまま逃げるが、ここでは着衣のままベッドに入り、着衣のまま走る。おそらく子どもに対する教育的配慮の結果であろう。騙されたと悟った狼が怒り狂ってスモモの木を引き抜き、引きずって走る姿は圧巻である。迫力ある筆致で描かれた絵は見る者を釘付けにする【図9】。狼の暴力に負けず、知恵で打ち勝つ少女の姿を描き出す口承の昔話には、食べるために必死で働いていた中世農民の生産者としての女性の姿が生き生きと映し出されている。

#### 6. まとめ

平成期に出版された「赤ずきん」は、ペロー版は少なく、グリム版のものが圧倒的に多い。原典に忠実な訳もかなり存在するが、自由に書き変えたパロディー調のものも目立つようになる。漫画やアニメ調の絵本はコンパクト版で安価な値段で販売されているので、普及率が高いと思われる。注目すべきは、赤ずきんが祖母と結託して狼を石桶の中で溺れさせる後日談を紹介する絵本が出版されている点だ。この話は「強い男に守られる弱い女」という「近代のジェンダー観」を刷り込む役割を果たしていない点で注目に値する。しかし一方、紙芝居や学校劇の台本では歌いながら森を歩く「赤ずきんの歌」が作詞作曲され、可愛く明るく疑うことを知らない無垢な少女像が強調されている。



【図9 片山健絵 樋口淳文 14】

彼女は食べられず、祖母のみが食べられて、狩人に救出される。「これからは、言いつけを守ります」という反省の言葉が、親や教師がこの本を子どもに与える理由の1つであろう。

救出者が狩人から樵に改変されている本も、樵が父親である本も、昭和期と同じように存在する<sup>39</sup>。昭和期と異なるのは、救出者が母親である本が出現することである。フライパンで狼を殴り殺す勇敢な母親が登場するのである。しかし同時に、獣の皮を縫うのは本来男の仕事であり、昭和期までは主として男の仕事とされていたのに、平成期になると女の家事に置き換えられ【図10】【図11】、近代の性別役割分担が挿入されている。狼の最後はグリム版では石が重くて床に倒れて死ぬが、平成期の絵本では井戸や川に落ちて死ぬという設定が増える。

平成期後半になると、グリム版に忠実な絵本が多くなると同時に、改作版や英語併記の絵本も増える。そこでは「悪なる存在」ではなく、赤ずきんと友達になりたい「善なる存在」としての狼が出現してくる。様々な人間が存在するように、様々な狼が存在する。「狼=悪」という見方は偏見につながるとして、赤ずきんに好意を持ち、

友達になりたいという狼を登場させた作家の出現は、人権尊重の立場から見ると喜ばしい。しかし、同時に「未知の存在」に対する警戒心を子どもに抱かせないという欠点も持つのではないだろうか。



【図10 船道愛子絵 本上紙魚子文78】



【図11 さこもみ絵 72】

#### 【資料】

- ① 1989年2月 スタジオパフ文・童公佳他絵『3さいの本 おはなし』講談社
- ② 1989年7月 平田昭吾著 高橋信也画『赤ずきん』よい子とママのアニメ絵本21 ブティック社
- ③ 1989年7月 さとうまきこ作 原ゆたか絵『いたずらあかずきんちゃん』あかね書房
- ④ 1989年12月 ペロー原作 定松正訳 サラ・ムーン絵『赤ずきん』西村書店
- ⑤ 1993年3月 ペロー作 TBSブリタニカ訳 リマ絵『赤ずきん・ろばのかわ』フェアリー世界名作シリーズ17 TBSブリタニカ
- ⑥ 1990年2月 幼年国語教育会編 松村三太郎／田中四郎絵『赤頭巾ちゃん』花園文庫5 登龍館
- ⑦ 1990年4月 筒井敬介著『あかずきんちゃん』カセット絵本アポッコ アポロン
- ⑧ 1990年5月 間所ひさこ文 松永禎郎絵『あかずきん』チャイルド絵本館2 グリム童話 チャイルト本社
- ⑨ 1990年8月 乾侑美子『グリムの昔話から1』語り手たちの会
- ⑩ 1991年1月 ヴァージニア・ハヴィランド編 シャルル・ペロー原作 小林忠夫訳 レイモンド・ブリッグズ絵『赤ずきん』ブリッグズの世界名作童話集III 篠崎書林
- ⑪ 1991年2月 グリム原作 武井直樹文 湯村タラ絵『あかずきん』ミキハウス
- ⑫ 1991年2月 グリム原作 若林利代文 頓田室子絵『あかずきんちゃん』世界の名作庫5 金の星社
- ⑬ 1991年12月 武鹿悦子文 秋里信子絵『あかずきん』名作昔話絵本 ひかりのくに
- ⑭ 1992年4月 樋口淳文 片山健絵『あかずきん』世界みんな絵本・フランス ほるぷ出版
- ⑮ 1993年6月 こわせたまみ文 いかわひろこ絵『あかずきん』世界名作えほんライブラリー⑤ フレーベル館
- ⑯ 1993年5月 岡田陽／落合聡三郎編 金平正作『学校劇選集①』玉川学出版部
- ⑰ 1993年9月 リチャード・スキヤリー文／絵 くまがいこうじ訳『スキヤリーの赤ずきん』金の星社
- ⑱ 1994年7月 シャルル・ペロー原作 久米穰文 ホセ・ラバレイヨ絵『あかずきんちゃん』世界の名作おはなしの森2 講談社インターナショナル(原作スペイン・パラモン社)
- ⑲ 1994年7月 ディック・ブルーナ作 角野栄子訳『あかずきん』講談社
- ⑳ 1994年12月 早野美智代文 宮本忠夫絵『あかずきん』(グリム童話)小学館
- ㉑ 1995年5月 ささきたづこ文 いもとようこ絵『赤ずきん』はじめてのおはなし絵本1 講談社
- ㉒ 1995年5月 小池タミ子文 奈良坂智子絵『赤ずきん』メイト
- ㉓ 1995年8月 わらべきみか絵『あかずきん』あかちゃんめいさく ひさかたチャイルド
- ㉔ 1995年10月 ジョナサン・ラングレイ著 斉藤洋訳『あかずきんちゃん』岩崎書店
- ㉕ 1996年5月 西本鶏介文 つかさおさむ絵『グリム』21世紀幼稚園百科 おはなし名作編 小学館
- ㉖ 1996年6月 ヤーコプ・グリム／ヴィルヘルム・グリム著 天沼春樹訳『魔法の森の女たち』パロル舎
- ㉗ 1996年6月 上野与志文 間瀬なおたか絵『あかずきんちゃんきをつけて』スーパーワイドゲーム絵本3

## チャイルド本社

- ⑳ 1996年11月 西本鶏介文 いもとようこ絵『子どもとお母さんのためのお話—世界のお話』講談社
- ㉑ 1996年12月 平田昭吾文 大野豊絵『赤ずきん』アニメ立体絵本 世界の名作5 ポプラ社
- ㉒ 1998年7月 La Zoo 構成 すがわらけいこ絵『あかずきん』はじめての名作仕掛け絵本4 学習研究社
- ㉓ 1998年8月 早野美智代文 浜田るり子絵『あかずきん』講談社
- ㉔ 1998年12月 岡田純也編著 木谷光江作「赤ずきん」『劇あそび脚本集』ひかりのくに
- ㉕ 1999年4月 欄巴文 上田三根子絵『あかずきん』ふぁーすとぶっく 名作シリーズ4 小学館
- ㉖ 1999年5月 立原えりか文 和歌山静子絵『赤ずきん』講談社
- ㉗ 1999年6月 西本鶏介文 藤田新策絵『グリム童話』ポプラ社
- ㉘ 1999年8月 矢部美智代文 浜田るり子絵『あかずきん』おはなしみずぬりえあそびえほん 講談社
- ㉙ 2000年5月 神沢利子文 岩本康之亮絵『あかずきん』チャイルド絵本館
- ㊀ 2000年5月 いもとようこ文/絵『あかずきん』岩崎書店
- ㊁ 2001年1月 樋口雅一著『まんがグリム童話 第1巻 親が知らない「子の心」』講談社
- ㊂ 2001年3月 斉藤洋作『グリム童話 二年生』偕成社
- ㊃ 2001年7月 落合恵子訳『あかずきん』絵本新編グリム童話選 毎日新聞社
- ㊄ 2001年8月 シャルル・ペロー文 エリック・バトゥー絵 池田香代子訳『ペローの赤ずきん』講談社
- ㊅ 2001年9月 矢川澄子再話 飯野和好絵『あかずきん』教育画劇
- ㊆ 2001年9月 J&W・Grimm 著 熊野驥一郎訳注『赤ずきん』イングリッシュシリーズ11 語学春秋社
- ㊇ 2002年5月 西本鶏介文 丸山明子絵『あかずきんちゃん』アンデルセン&グリム2 チャイルド本社
- ㊈ 2003年4月 矢部美智代文 とりごえまり絵『世界名作30選 おともだちよみかかせえほん』講談社
- ㊉ 2004年1月 北川幸比古/鬼塚りつ子『グリム・イソップ童話集』世界文化社
- ㊊ 2004年8月 山口四郎訳『グリム童話1』富山房
- ㊋ 2004年12月 バーリー・ドハティ文 ジェーン・レイ絵 神戸万知訳『絵巻物語 フェアリーテイル』原書房
- ㊌ 2005年3月 柿沼美浩文 中村満絵『あかずきん』キープ(絵本+DVD+CD) 英語併記
- ㊍ 2005年4月 グリム兄弟作 天沼春樹訳 大竹茂夫絵『あかずきん』絵本グリムの森⑥ パロル舎
- ㊎ 2005年7月 古藤ゆず文 かろくこうぼう人形『あかずきん』めいさくのたからばこ 学研教育
- ㊏ 2005年9月 中島和子文 牧野鈴子絵『赤頭巾』出会い文庫9 登龍門
- ㊐ 2005年10月 川元咲乃/木野彩花文『AKAZUKIN POP in CUP』フローベル館
- ㊑ 2005年12月 クリスティーナ・アリソン著 高橋啓訳『365日のベッドタイム・ストーリー』飛鳥新社
- ㊒ 2006年9月 平田昭吾著 高橋信也絵『赤ずきん』(動く絵本DVD付) 英語併記 産経新聞出版
- ㊓ 2006年11月 はやのみちよ文 ほっふ絵『赤ずきん』ポプラ社
- ㊔ 2006年11月 島津和子編 山下以登絵『じゃぶじゃぶ紙芝居17 あかずきん』フロンティアニセン
- ㊕ 2006年11月 まえだえま文 ふりやかよこ絵『ママといっしょに あかずきんちゃん』ポプラ社
- ㊖ 2006年12月 寺村輝夫文 杉田豊絵『あかずきんちゃん』世界名作おはなし絵本 小学館
- ㊗ 2007年6月 いもとようこ文/絵『あかずきんちゃん』金の星社
- ㊘ 2007年6月 小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし研究所再話『語るためのグリム童話2』小峰書店
- ㊙ 2007年6月 間所ひさこ文 平きょうこ絵『グリムおはなし絵本』3歳から親子で楽しむ本 主婦と生活社
- ㊚ 2007年12月 小春久一郎編 香山美子文 秋里信子絵『語り聞かせ 世界むかしばなし たっぷり68話!』ひかりのくに
- ㊛ 2009年3月 すぎうらさやか文/絵『赤ずきん』白泉社
- ㊜ 2009年5月 山本和子文 アンナ・ツソウバ絵『あかずきん』学研おとぎばなし 学研教育みらい
- ㊝ 2009年7月 マーレンス・カチューピカ作 山本まつよ訳『赤ぼうしちゃん』子ども文庫の会
- ㊞ 2009年12月 西川律子文/絵『もうひとつの赤ずきんちゃん』銀の鈴社 英語併記
- ㊟ 2009年 グリム兄弟原作 虎頭恵美子文 篠崎三朗絵『赤ずきん』世界文化社
- ㊠ 2010年6月 竹内もと代作 辻村鮎子絵 柴田勝重編著『魔法つかい赤ずきんちゃん』ポプラ社
- ㊡ 2010年10月 大石真文 すまいるママ絵「赤ずきん」『名作よんでよんでグリム童話15話』学研プラス
- ㊢ 2010年11月 La ZOO 編 さこももみ絵『あかずきん』はじめてのめいさくしかけえほん4 学研教育出版
- ㊣ 2011年6月 楠山正雄訳 薙柳緒絵『赤ずきんちゃん』東葛西豆本シリーズ
- ㊤ 2012年3月 那須田淳訳 北見葉胡画『あかずきん』岩崎書店
- ㊦ 2002年10月 大塚勇三訳 フェリクス・ホフマン画『赤ずきん グリムの昔話2』福音館書店

- ⑦⑥ 2012年6月 西本鶏介文『グリム童話』ポプラ社
- ⑦⑦ 2012年11月 大石真文 小方桂子編『よんでよんで おやすみ前のお話 366話』1巻 学研教育出版
- ⑦⑧ 2013年2月 本上紙魚子文 船道愛子絵『あかずきん』せかいめいさくアニメえほん11 河出書房新社
- ⑦⑨ 2013年2月 佐々梨代子/野村滋訳 ハンス・フィッシャー絵『メルヘンビルダー』こぐま社
- ⑦⑩ 2013年4月 立原えりか文 立樹まや絵『キラキラかわいいおんなのこのおはなし』ナツメ社
- ⑦⑪ 2014年3月 那須田淳文 おおでゆかこ絵「赤ずきんちゃん」野上暁編著『子どもに読んであげたい 365日のおはなし』成美堂
- ⑦⑫ 2014年4月 グリム作 矢川澄子訳 こみねゆら絵「あかずきん」西本鶏介編『いつまでも心に残る女の子に贈りたい名作』PHP 研究所
- ⑦⑬ 2014年5月 中島千絵文 南あかり画『あかずきん』名作アニメかみしばい 永岡書店
- ⑦⑭ 2014年11月 佐古百美 荻田澄子著編『あかずきん』0~3さい カードつき名作 学研教育出版
- ⑦⑮ 2014年12月 内田伸子『やさしい思いやりの心をはぐくむ女の子のお話』ナツメ社
- ⑦⑯ 2015年2月 千葉幹夫著『グリムどうわ』母と子のおやすみまえの小さな絵本 ナツメ社
- ⑦⑰ 2015年3月 立原えりか文 青山みるく絵『立原えりかのグリム童話』朝日学生新聞社
- ⑦⑱ 2015年5月 高見のつぼ文 田頭よしほか絵『赤頭巾』なかよし文庫5 登龍門
- ⑦⑲ 2015年6月 秋田喜代美編『こころを育てるおはなし 101』高橋書店
- ⑦⑳ 2015年7月 グザビエ・ドゥヌ作『あかずきんちゃん』おはなしデコポン絵本(立体的絵本) 小学館
- ⑦㉑ 2015年8月 いいいいくよ文 八木橋麗代絵「赤ずきん」PHP 研究所編『ポケット版考える力を育てる話 100』PHP 研究所
- ⑦㉒ 2016年2月 早野美智代再話 すまいるママ絵「あかずきん」『めばえ』3月号 小学館
- ⑦㉓ 2016年4月 間所ひさこ再話『教科書に出てくる世界の昔話1』あかね書房
- ⑦㉔ 2016年4月 シャルル・ペロー原作 ツェーザリ・キュイ作曲 山西和枝訳『赤ずきん』(オペラ) 圭文社
- ⑦㉕ 2016年6月 川並知子制作『あかずきん』こどもとつくるおりがみえほん 聖徳大学出版会
- ⑦㉖ 2016年6月 NPO 多言語多読再話 酒井茜絵『赤ずきんちゃん』大修館書店
- ⑦㉗ 2016年11月 グリム兄弟作 安東みきえ文 ORANGE 絵『グリム童話』世界名作どうわ15 ポプラ社
- ⑦㉘ 2016年12月 ささきあり文 秋咲りお絵「あかずきん」西東社編集部『おんなのこのめいさくえほん ベストセレクション80』西東社
- ⑦㉙ 2016年12月 西東社編集部『心をはぐくむ てのひら名作えほん』西東社
- ⑧① 2017年3月 種村拡文 ささめやゆき絵『暗黒グリム童話集』講談社
- ⑧② 2017年5月 こわせたまみ文 植田真絵『あかずきん』グリム童話 フレーベル館
- ⑧③ 2017年6月 小川こころ文 水野ぷりん絵『ココロが育つよみきかせ絵本 グリム童話50選』東京書籍
- ⑧④ 2017年12月 ジャン・リュック・ピュケ著 大澤千加訳『赤ずきんーオオカミのひみつ』洋洋社
- ⑧⑤ 2018年3月 中脇初枝文 岩崎知子絵『あかずきん』はじめての世界名作えほん5 ポプラ社
- ⑧⑥ 2018年9月 カトウシンジ著『あかずきんちゃん』ワークス
- ⑧⑦ 2018年9月 千葉幹夫編著 黒井健絵『読み聞かせおはなし絵本1』むかしばなし・名作20 成美堂
- ⑧⑧ 2018年12月 はまだみわ文/絵 『あかずきん』石田製本
- ⑧⑨ 2019年3月 PHP 研究所編『考える力を育てるお話』PHP 研究所
- ⑧⑩ 2019年3月 堀川理万子文/絵「赤ずきん」小澤俊夫監修『読んでおきたいお話 小学1年』成美堂
- ⑧⑪ 2019年3月 吉澤康子/和蘭桃子訳 アーサー・ラッカム絵『夜ふけに読みたい 不思議なイギリスのおとぎ話』平凡社

注

- 1 野口芳子「明治期における『赤ずきん』の受容について—最初の邦訳と邦訳者を中心に—」『梅花児童文学』26号 2018年6月 94-110頁。野口芳子「日本における『赤ずきん』の受容—明治・大正期を中心に—」日本昔話学会『昔話—研究と資料』47号 2019年3月 79-93頁。野口芳子「日本における『赤ずきん』の受容—昭和期を中心に—」『梅花児童文学』27号 2019年6月 86-103頁。
- 2 ④は【資料】の番号を指す。ただし100以上の番号は⑩〇〇で表示する。
- 3 シャルル・ペロー原作 ツェーザリ・キュイ作曲 山西和枝訳『赤ずきん』圭文社 2016年 はじめに Кюи, Цезарь Антонович, *Красная шапочка*, Детская опера-сказка (по Перро) / Текст М. С. П.; Муз. Цезаря

- Кюи. Москва 1912.(ロシア語と日本語のテキスト照合は丸尾美保氏に依頼し、忠実訳であることを確認した)。
- 4 寺村輝夫編『フェアリー世界名作シリーズ Reader's Guide』TBS ブリタニカ 1990年 奥付「原書の執筆者たち」。
- 5 69冊の資料番号: 2,8,9,11,12,13,15,20,21,22,25,26,28,29,33,34,35,36,37,39,40,41,43,44,45,46,47,48,51,56,58,59,60,61,62,63,66,67,69,71,73,74,75,76,77,78,79,80,81,82,85,86,87,89,91,92,93,96,97,98,99,100,101,102,104,106,107,108,109=69話。
- 6 8,9,13,15,21,22,26,28,34,35,37,39,40,41,45,46,47,48,51,58,59,60,62,63,66,67,69,73,74,75,76,77,79,82,86,91,93,97,104,108,109=41話。
- 7 11,20,25,33,36,43,56,61,71,78,80,81,85,87,89,92,96,98,99,101,102,106,107=23話。
- 8 1,5,6,7,10,16,19,23,30,31,32,50,52,55,64,72,83,84,88,90,95,103=22話。
- 9 17,18,24,49,65,94=6話。
- 10 9,11,26,39,41,74=6話。
- 11 Rudolf Carl Gottfried Geissler が1872年に描いたドイツ一枚絵、244号。
- 12 22,35,47,48,59,62,67,73,75,76,79,82=12話。
- 13 35,47,48,62,73,76=6話。
- 14 22,59,67,75,79,82=6話。
- 15 1990年には米国カリフォルニア州の教育関係者が『赤ずきん』をやり玉に挙げ、結果として2つの校区で禁止される出来事があった。問題視されたのは「おばあちゃんへの贈り物に含まれていたワイン」である。具体的には、未成年にアルコールを飲ませたこと、狼がワインを飲み干して顔を赤くする描写などが「教育上よろしくない」とされた。「昔話が図書館から消える! 『美女と野獣』は性差別的な物語!? ポリコレ的にNGな童話の世界」雑誌『サイズ』2019年7月号。82-85頁。
- 16 8,13,15,21,28,34,37,40,45,46,51,58,60,63,66,69,77,86,91,93,97,104,108,109=24話。
- 17 15,21,28,34,37,38,40,45,46,58,63,66,69,77,86,91,93,108,109=19話。
- 18 15,21,38,40,46,53,58,60,63,66,86,91,108=13話。
- 19 15,21,28,34,38,40,46,53,63,66,69,77,91,97,104,108,109=17話。
- 20 13,51,57,69,97,108=6話。
- 21 8,21,28,37,46,53,58,66=8話。
- 22 40,77,86,104,109=5話。
- 23 *Little Red Riding Hood and Other Stories*, Translated by A. Atkin Stuart, Ill. by Yoko Imoto. Tokyo: Kodansha International, 2003.
- 24 1,5,6,7,10,11,16,19,20,23,25,30,31,32,33,36,43,50,52,55,56,61,64,71,72,78,80,81,83,84,85,87,88,89,90,92,95,96,98,99,101,102,103,106,107=45話。
- 25 2,12,17,29,44,49,94=7話
- 26 11,31,36,44,50,52,65,92,94=9話。
- 27 7,10,20,30,33,72,84,85,90,94=10話。
- 28 この話をグリム兄弟に語ったジャネット・ハッセンプフルークは最後の場面を「KHM5 狼と七匹の子山羊」と混成して語ったのではないかと、とロルフ・ハーゲン(1955)も論文で指摘している。Hagen, Rolf, Perraults Märchen und die Brüder Grimm, *Zeitschrift für Deutsche Philologie* 74, pp. 392-410.
- 29 1,6,7,16,19,20,23,25,30,32,33,43,52,55,56,61,64,71,72,81,83,84,85,88,89,90,92,95,98,99,102,106=32話。
- 30 1,6,7,20,23,30,31,32,33,36,49,50,52,55,61,64,72,78,80,81,83,84,85,88,92,98,99,101,102,106,107=31話。
- 31 2,11,19,23,25,31,33,36,50,56,80,85,87,89,90,92,96,98,99,101,106=21話。
- 32 *Little Red Riding Hood*, Retold by Vera Southgate, Ill. by Peter Stevenson. Loughborough: Ladybird 1988.
- 33 ⑱ 奥付に、印刷・製本 c/o Paramón Ediciones, S. A. in Spain と明記されている。
- 34 *Little Red Riding Hood* (© Shiba production), A Living Story Book. New York: Crown 1959.
- 35 瀬名波栄潤『映画で学ぶ女性の生き方』男女共同参画講演会録 2009年1月30日 6-7頁。
- 36 外務省はポップカルチャー(ファッション分野)に関し、平成21年2月26日、広報文化交流部長から次の3名にポップカルチャー発信使(通称:カワイイ大使)の委嘱状を交付すると発表。青木美沙子(ロリータファッション界カリスマ)、木村優(原宿系ファッション)、藤岡静香(ブランド制服ショップ「CONOMi」アドバイザー) [https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/21/2/1188512\\_1092.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/21/2/1188512_1092.html) アクセス2019年11月1日
- 37 會澤まりえ/大野実『「かわいい文化」の背景』『尚絅学院大学紀要』59号 2010年 23頁。2010.2.18. NHK「東京カワイイ★TV」は通常日曜日放送。
- 38 西川律子文絵『もうひとつの赤ずきんちゃん』銀の鈴社 2009年 あとがき。
- 39 昭和期における「赤ずきん」については、注1の拙論(『梅花児童文学』27号,86-103頁)を参照。